

音楽が喚起する懐かしさの検討

—— 2種類の懐かしさと自伝的記憶想起との関連 ——

生 方 歩・佐 藤 浩 一

Nostalgia Eveded by Music:

Two Types of Nostalgia and Autobiographical Memory Remembering

Ayumi UBUKATA and Koichi SATO

音楽が喚起する懐かしさの検討

—— 2種類の懐かしさと自伝的記憶想起との関連 ——

生方 歩¹⁾・佐藤 浩²⁾

1) しのめ信用金庫

2) 群馬大学大学院教育学研究科教職リーダー講座

(2024年10月16日受理)

Nostalgia Eoked by Music: Two Types of Nostalgia and Autobiographical Memory Remembering

Ayumi UBUKATA¹⁾ and Koichi SATO²⁾

1) SHINONOME SHINKIN BANK

2) Program for Leadership in Education, Graduate School of Education, Gunma University

(Accepted on October 16th, 2024)

キーワード：音楽、懐かしさ、自伝的記憶

Key words: Music, Nostalgia, Autobiographical memory

問題と目的

昔聴いていた曲を耳にしたり、昔の光景を目にした時、人は「懐かしい」という感情を抱く。懐かしさ（ノスタルジア）に関してはこれまで、何がきっかけで生じるのか、懐かしさはどういう感情から構成されているのか、懐かしさを感じることにどのような機能があるのか等、多角的な検討が行われてきている（楠見，2014）。

懐かしさに関して川口（2014）は、その生起プロセスに着目し、「ノスタルジア感情Ⅰ」「ノスタルジア感情Ⅱ」という区別を提唱している。「ノスタルジア感情Ⅰ」は、ある手がかりから自動的かつ急速に感じられるノスタルジア感情である。一方「ノスタルジア感情Ⅱ」は、手がかりからエピソード記憶（自伝的記憶）の詳細を想起し、その後、ゆっくりと感じられるノスタルジア感情である。例えば、子どもの頃に耳にした曲を聴き、その瞬間に「あ、懐

かしい！」と感じられるのがノスタルジア感情Ⅰである。これに対して、その曲を聴いて「よく友達と歌った」などの具体的な思い出を想起して感じられるのがノスタルジア感情Ⅱである。

ノスタルジア感情ⅠとⅡの区別は経験的には納得できるものであるが、その妥当性は検討されていない。しかしながら音楽を刺激として用いて懐かしさと自伝的記憶想起との関連を検討した先行研究の中に、ノスタルジア感情ⅠとⅡの区別を示唆するものがある。

大寺・田中（2019）は大学生を対象として、予備調査によって選定された「懐かしい」音楽3曲を各15秒間呈示し、「懐かしさ」等の評定、思い出した出来事があるかどうかの回答を求めた。その結果、具体的な出来事を思い出すか否かにかかわらず、懐かしさが高く評定されていた。一方、小林ら（2002）は大学生を対象として、「懐かしい」音楽4曲を各3分間呈示したうえで、懐かしさ等の評定を求めた。

さらに音楽を聴いていた時に思い浮かんだことの自由記述を求め、そこに含まれる過去の体験を自伝的記憶の想起量とした。分析の結果、懐かしさの評定と自伝的記憶の想起量の間には有意な正の相関が認められた。

このように大寺・田中（2019）では、自伝的記憶の想起と懐かしさの間に関連はなく、小林ら（2002）では両者の間に関連が認められた。こうした違いは、音楽の呈示時間が前者では15秒、後者では3分であったことが要因として考えられる。すなわち大寺・田中（2019）の実験で喚起された「懐かしさ」は音楽から急速に感じられた「ノスタルジア感情Ⅰ」であり、そのため、具体的な出来事を思い出していても強い懐かしさが感じられたと考えられる。これに対して小林ら（2002）の実験で喚起された「懐かしさ」は、自伝的記憶の想起を伴いゆっくりと喚起された「ノスタルジア感情Ⅱ」であり、想起量が多いほど懐かしさも強く評定されたと解釈できる。

しかしながら二つの研究は手続きが大きく異なっており、ノスタルジア感情Ⅰ・Ⅱの違いと対応づけた上記の解釈も、仮説の域を出ない。そこで本研究では、懐かしい音楽を刺激として用いて3分間呈示し、その間に思い浮かんだことを発話して貰う。さらに15秒経過時点と3分経過時点で、懐かしさや過去の出来事を思い出したか等の評定を求める。この手続きにより、音楽刺激の呈示から急速に感じられるノスタルジア感情Ⅰと、その後ゆっくりと感じられるノスタルジア感情Ⅱについて、両者の差異を検討する。ここまでの議論から15秒時点では懐かしさ等の評定と自伝的記憶想起の間には関連はなく、3分経過時点では関連が見られると予測される。

予備調査

実験に用いる「懐かしい」音楽を選定するために、以下の予備調査を実施した。なお大寺・田中（2019）も小林ら（2002）も、単に「懐かしい音楽」として選定していた。しかし自伝的記憶は「人生の時期（Lifetime period）」と呼ばれる時間軸に沿って構造

化されていることから（佐藤，2008）、「小学校3年生頃まで」「中学生・高校生」という時期を指定し、懐かしい音楽を収集した。また大寺・田中（2019）ではクラシック曲、J-POP、洋楽など様々なジャンルの音楽が混ざっていた。小林ら（2002）では童謡や流行歌などが用いられていた。本研究では曲のタイプを最低限統制するために、ジャンルは問わないが、歌詞の付いているものを収集することとした。

予備調査 1

第二著者が担当する授業時間を利用し、小学校3年生頃までに聞いていた懐かしいと思う曲と、中学生・高校生の時に聞いていた懐かしいと思う曲を1曲ずつあげるよう求めた。ジャンルは問わないが、歌詞の付いているものをあげるよう教示した。協力は受講者の自由意志によるもので成績に影響しないことを説明したうえで、オンラインで回答を収集した。

60名から回答を得た。小学校3年生頃までの曲が58曲、中学生・高校生の時の曲が57曲、あげられた。これらのなかから複数の参加者があげた曲を、本実験で使用する曲の候補とした。該当する曲は、以下のとおりである。小学校3年生頃までの曲は「キセキ」（歌手：GReeeeN、回答者3名）、「グリーン・グリーン」（合唱曲、回答者2名）、「ドレミの歌」（合唱曲、回答者2名）であった。中学生・高校生の時の曲は、「クリスマスソング」（歌手：back number、回答者2名）、「高嶺の花子さん」（歌手：back number、回答者2名）、「pretender」（歌手：Official髭男dism、回答者2名）であった。

予備調査 2

予備調査1で選定された6曲を実際に聴取して、懐かしさが引き起こされるか検討することを目的とした。第二著者が担当する、予備調査1とは異なる授業時間を利用した。協力は受講者の自由意志によるもので、成績に影響しないことを説明した。教室前方からノートPCを用いて、6つの曲を1曲ずつ、大寺（2019）に基づき、サビを起点に15秒間呈示した。各曲の呈示直後に、懐かしさをどれくらい感じるか、1（全く感じない）、2（感じない）、3（あまり感じない）、4（少し感じる）、5（感じる）、6（と

でも感じる)の6件法で回答を求めた。

18名から回答が得られた。懐かしさの平均とSDは、「キセキ」(平均4.9、SD=1.3)、「グリーン・グリーン」(平均3.6、SD=1.7)、「ドレミの歌」(平均4.4、SD=1.5)、「クリスマスソング」(平均4.2、SD=1.1)、「高嶺の花子さん」(平均3.4、SD=1.3)、「pretender」(平均2.9、SD=1.4)であった。

この結果から「懐かしさ」を喚起しやすい曲として、小学校3年生頃までの曲として「キセキ」と「ドレミの歌」、中学生・高校生頃の曲として「クリスマスソング」と「高嶺の花子さん」を用いることとした。なお「ドレミの歌」は合唱曲であり様々なバージョンがある。本実験ではサビを起点に3分間呈示する必要があることから、複数バージョンを比較し、映画「サウンド・オブ・ミュージック」の日本語吹替版の音声を用いることとした。

方 法

参加者

A 大学教育学部の学生30名(18歳~22歳)が実験に参加した。

曲

予備実験で選定された4つの曲を使用した。「キセキ」、「ドレミの歌」、「クリスマスソング」、「高嶺の花子さん」である。また、発話練習用の曲として「グリーン・グリーン」を使用した。

手続き

個別で実験を行った。音楽を聴きながら考えたことや頭に浮かんだこと、感じたこと、思い出したことなどをどんどん言葉にして自由に話すよう教示した。はじめに発話練習用の曲を15秒と45秒に区切って、全部で1分間呈示し、発話の練習を行った。その後、1曲目を呈示した。サビを起点に15秒間呈示した時点でいったん曲を止めて、質問紙に回答を求めた。回答後、曲の続きから呈示し、3分間呈示した後、再び質問紙に回答を求めた。曲を呈示している間は、発話を促し、それを録音した。これを4曲について繰り返した。曲の順番は参加者間でカウンターバランスを取った。

質問紙

懐かしさは、単純にポジティブあるいはネガティブに分類できない、複雑な感情である(川口, 2014)。懐かしさを測定する尺度として、国内の研究では、瀧川・仲(2014)、石井(2014)、宇佐美(2022)がある。瀧川・仲(2014)は、「ポジティブ感情」因子(例:いきいきした)、「リラックス感情」因子(例:のんびりした)、「哀愁感情」因子(例:さびしい)の3因子30項目から構成される尺度である。石井(2014)は、「親しみ」因子(例:たのしい)、「せつなさ」因子(例:せつない)、「おかしさ」因子(例:おかしい)の3因子14項目から構成される尺度である。宇佐美(2022)は、「親しみ」因子(例:ほっとする)、「ほろ苦さ」因子(例:つらい)、「せつなさ」因子(例:せつない)の3因子23項目から構成される尺度である。

このように、3つの尺度で性質の異なる因子もあり、懐かしさが複雑な感情であることがわかる。そこで本研究では、瀧川・仲(2014)の3因子に該当する項目に、石井(2014)の「おかしさ」因子の項目、宇佐美(2022)の「ほろ苦さ」因子の項目を加えた。ただし項目数が多くなり参加者の負担になることを避けるため、瀧川・仲(2014)のポジティブ感情因子とリラックス感情因子については、因子負荷量が高い5~6項目を抽出して用いた。懐かしさの評定に用いたのは、ポジティブ感情因子「元気な」「充実した」「大切な」「うれしい」「楽しい」「愛着のある」、リラックス感情因子「ゆったりした」「静かな」「おちついた」「安心な」「ほのぼのとした」、哀愁因子「さびしい」「もの悲しい」「切ない」「孤独な」「空虚な」、ほろ苦さ因子「つらい」「悔しい」「苦しい」「恥ずかしい」、おかしさ因子「おかしい」「照れくさい」「古くさい」であった。ところでこれらの尺度は懐かしさを多面的に捉えているが、「懐かしい」という項目そのものは含まれていない。そこで「懐かしさ」を代表する項目として「懐かしい」を加えた。また自伝的記憶の想起量を検討するために、「小学生の頃のことを思い出した」、「中・高生の頃のことを思い出した」、「大学生になってからのことを思い出した」という項目を加えた。いずれも

1 (全くあてはまらない) ~7 (非常にあてはまる) の7件法で評定を求めた。

音楽に伴う感情を研究する場合、音楽作品が持つ感情的な性格と、聞き手が体験する感情とを区別しなければならない(谷口, 2021)。本研究では「音楽を聴いてどんな気分・感情が生じましたか」と問うことで、音楽作品ではなく、体験された感情を評定するよう求めた。実験全体では約30分を要した。

倫理的配慮

参加者の募集に際しては実験の概要と必要時間を説明したうえで、本人の自由意志による参加を依頼した。実験の開始前にはあらかじめ必要時間を説明した。さらに、データは個人が特定されないかたちで分析され公表されることを説明し、口頭で同意を得た。感染症予防に配慮し、換気・消毒を十分行ったうえで実験を開始した。実験後には参加者に、研究の目的等についてデブリーフィングを行い、謝礼(図書カード500円分)を渡した。

結 果

予備的分析

ノスタルジア感情ⅠとⅡについて検討するのに先立ち、予備的な分析を行う。

第一に、刺激として用いた曲が、当時の出来事を喚起するものであったか、「小学生の頃のことを思い出した」、「中・高生の頃のことを思い出した」、「大学生になってからのことを思い出した」の3項目の

評定結果から検討する。評定結果、分散分析の結果、多重比較(Ryan法)の結果を、表1に示す。それぞれの曲について想起された時期(小学生、中・高生、大学生)に違いがあるかを分散分析で検討した。4曲全て、15秒時点でも3分時点でも1%水準で有意差が見られた。曲により、また15秒時点と3分時点により違いもあるが、小学校3年生頃までの曲である「キセキ」と「ドレミの歌」は古い時期の出来事を思い出させ、中・高生頃の曲である「クリスマスソング」と「高嶺の花子さん」は新しい時期の出来事を思い出させる傾向が認められた。ここから用いた曲は概ね適切なものであったと言える。その曲を聞いていた時期の思い出だけに限定して想起されなかったのは、次の理由によると考えられる。まず曲という刺激の特性上、小学生頃に聞いていた曲をその後耳にしたり歌ったりすることもある。また「キセキ」は野球部を舞台にしたドラマの主題歌であり、そこから自身の中・高校生時代の部活動に連想が広がったことも考えられる。

第二に、曲が喚起したノスタルジア感情の性質について、「懐かしい」やポジティブ感情因子などの項目の評定結果から検討する。各因子については、そこに含まれる複数項目の平均評定を用いた。結果を表2に示す。それぞれの曲について、どの感情が強く感じられたかを分散分析で検討した。4曲全て、15秒時点でも3分時点でも1%水準で有意差が見られた。多重比較(Ryan法)の結果、どの曲も、15秒時点・3分時点のいずれでも、「懐かしい」が最

表1 曲から「小学生」「中・高生」「大学生」の頃の出来事が想起された程度

曲名	時点	小学生	中・高生	大学生	F (2,58)	多重比較
キセキ	15秒	5.1 (2.1)	5.1 (1.9)	2.9 (2.0)	12.84	小=中・高>大
	3分	5.1 (2.1)	6.1 (1.4)	3.8 (2.3)	11.08	中・高>小>大
ドレミの歌	15秒	5.0 (2.3)	2.3 (1.9)	2.5 (1.9)	16.38	小>中・高=大
	3分	5.6 (2.1)	2.9 (2.3)	3.2 (2.4)	12.87	小>中・高=大
クリスマスソング	15秒	2.3 (1.9)	5.0 (2.1)	3.9 (2.1)	16.09	中・高>大>小
	3分	2.4 (2.2)	5.8 (1.5)	4.9 (2.1)	20.99	中・高=大>小
高嶺の花子さん	15秒	2.2 (1.9)	5.0 (2.3)	4.3 (2.3)	17.70	中・高=大>小
	3分	2.4 (2.2)	5.8 (1.7)	5.3 (2.1)	28.22	中・高=大>小

() は SD

表2 曲から感じられる懐かしさ

曲名	時点	懐かしい	ポジティブ感情因子	リラックス感情因子	哀愁因子	ほろ苦さ因子	おかしさ因子	F(5,145)	多重比較
キセキ	15 秒	6.4(0.9)	4.9(0.9)	4.6(1.1)	2.7(1.1)	1.9(1.0)	2.1(0.9)	123.38	1 > 2 = 3 > 4 > 6 = 5
	3 分	6.4(0.8)	5.3(0.9)	4.7(1.1)	2.8(1.1)	2.1(1.0)	2.1(1.0)	113.36	1 > 2 > 3 > 4 > 5 = 6
ドレミの歌	15 秒	5.7(1.6)	4.3(1.1)	4.2(1.1)	1.3(0.6)	1.4(0.6)	2.4(1.4)	81.88	1 > 2 = 3 > 6 > 5 = 4
	3 分	6.2(1.1)	5.4(0.9)	3.4(1.0)	1.4(0.8)	1.4(0.6)	2.4(1.4)	136.48	1 > 2 > 3 > 6 > 4 = 5
クリスマスソング	15 秒	4.9(1.8)	3.6(1.1)	5.2(0.8)	4.3(1.4)	2.4(1.2)	1.8(0.9)	45.57	3 = 1 = 4 > 2 > 5 > 6
	3 分	5.8(1.5)	4.0(1.1)	5.0(1.0)	4.2(1.4)	2.5(1.4)	2.0(1.1)	43.92	1 > 3 > 4 = 2 > 5 = 6
高嶺の花子さん	15 秒	5.6(1.6)	4.8(1.4)	2.7(1.2)	2.3(1.4)	2.1(1.5)	2.1(1.1)	43.82	1 > 2 > 3 = 4 = 5 = 6
	3 分	5.8(1.6)	5.1(1.2)	2.9(1.2)	2.6(1.3)	2.5(1.6)	2.4(1.2)	44.05	1 > 2 > 3 = 4 = 5 = 6

() は SD

多重比較

- 1 懐かしい 2 ポジティブ
 3 リラックス 4 哀愁
 5 ほろ苦さ 6 おかしさ

表3 15 秒時点での評定と 3 分時点での評定の相関

	キセキ	ドレミの歌	クリスマスソング	高嶺の花子さん
懐かしい	.374 *	.502 **	.761 **	.422 *
ポジティブ感情因子	.816 **	.500 **	.748 **	.854 **
リラックス感情因子	.691 **	.574 **	.771 **	.849 **
哀愁因子	.478 **	.676 **	.774 **	.780 **
ほろ苦さ因子	.711 **	.430 *	.753 **	.788 **
おかしさ因子	.526 **	.758 **	.755 **	.811 **
小学生の頃	.804 **	.439 **	.928 **	.818 **
中・高生の頃	.554 **	.484 **	.159	.543 **
大学生	.653 **	.554 **	.505 **	.751 **

*p < .05 **p < .01

も強かった。またポジティブ感情因子やリラックス因子の評定が高かった。ノスタルジアは幸福、悲しみ、ほろ苦さなど様々な感情の複合体であるが、主としてポジティブな調子を帯びた感情であり(石井, 2014; 小林・大竹, 2018)、本研究の結果もこのことと整合する。

第三に、15 秒時点と 3 分時点での感情や自伝的記憶想起の関連を検討する。表 3 に「懐かしい」、「ポジティブ感情因子」等の評定平均、「小学生の頃のことを思い出した」等 3 項目の評定について、15 秒時点と 3 分時点での相関係数を示す。ほぼ全てに

おいて、1%水準で有意な相関が認められた。従って、15 秒時点での懐かしさや自伝的記憶の想起は、そのまま 3 分時点にも持ち越されたと言える。

第四に、本研究では 15 秒間あるいは 3 分間の発話に続けて、「小学生の頃のことを思い出した」等の評定を求めた。発話に含まれる自伝的記憶と、評定値との関係を確認しておく。15 秒間の発話については、具体的な想起が含まれていた (1)、いなかった (0) の 2 段階で評価分類した。3 分間の発話については、そこに含まれる記憶の鮮明さ・詳細さを、1 (鮮明さや詳細さが乏しい) ~ 5 (とても鮮明で詳

細)の5段階で評価分類した。15秒間の発話に想起が含まれていた参加者と含まれていなかった参加者で、「小学生の頃のことを思い出した」等の評定を比較した結果を、表4に示す。「クリスマスソング」において、発話に想起が含まれていた参加者の方が、「小学生の頃のことを思い出した」の評定値が高かった。それ以外では有意な差は見られなかった。3分間の発話評定と「小学生の頃のことを思い出した」等の評定との相関を表5に示す。「ドレミの歌」と「高嶺の花子さん」で、記憶の鮮明さ・詳細さと「小学生の頃のことを思い出した」「中・高生の頃のことを思い出した」との間に有意な相関が見られた。それ以外では有意な相関は見られなかった。以上より、発話に含まれた自伝的記憶と「～の頃のことを思い出した」という評定とは比較的独立したものと考えられる。そこで両者それぞれを、結果の分析に用いることとする。

ノスタルジア感情 I の検討

15秒時点で感じられた懐かしさが、川口(2014)の「ノスタルジア感情I」に相当するものであるか検討する。懐かしさは複合的な感情であるが、以下の分析にあたっては「懐かしさ」を代表する項目「懐かしい」の評定を中心に検討する。そこで一定の傾向が認められた場合には、「懐かしさ」を構成するポジティブ感情因子等についての検討も追加する。ノスタルジア感情Iは、刺激から自動的に喚起される懐かしさである。懐かしさと想起量との間に関連はないと予測される。このことを2つの観点から検討する。

第一に、15秒間の発話の中に具体的な想起が含まれていたかいなかったかで参加者を分け、「懐かしい」の評定に差があるか、検討する。結果を、表6に示す。4曲のいずれにおいても、発話の中に具体的な想起が含まれていた参加者と、そうでない参加者の間で、「懐かしい」の評定に有意な差は無かった。これは大寺・田中(2019)と一致する結果である。

第二に、15秒時点での「懐かしい」と、「小学生の頃のことを思い出した」、「中・高生の頃のことを思い出した」、「大学生になってからのことを思い出

表4 15秒時点での発話における想起の有無と「出来事を思い出した」評定との関連

		想起	平均(SD)	t(df=28)
キセキ	小学生	あり	5.6(1.6)	1.14
		なし	4.7(2.3)	
	中・高生	あり	5.0(2.5)	0.21
		なし	5.2(1.6)	
	大学生	あり	3.7(2.6)	1.66
		なし	2.5(1.6)	
ドレミの歌	小学生	あり	4.7(2.3)	0.64
		なし	5.2(2.3)	
	中・高生	あり	2.9(2.3)	1.31
		なし	1.9(1.5)	
	大学生	あり	2.3(1.9)	0.39
		なし	2.6(2.0)	
クリスマスソング	小学生	あり	3.5(2.4)	3.13 *
		なし	1.5(0.9)	
	中・高生	あり	5.7(1.3)	1.53
		なし	4.5(2.5)	
	大学生	あり	4.2(2.1)	0.66
		なし	3.7(2.2)	
高嶺の花子さん	小学生	あり	1.8(1.4)	0.98
		なし	2.4(2.1)	
	中・高生	あり	5.1(2.4)	0.22
		なし	4.9(2.4)	
	大学生	あり	4.7(2.2)	0.70
		なし	4.1(2.4)	

*p < .05

キセキ	想起あり：n = 11, 想起なし：n = 19
ドレミの歌	想起あり：n = 13, 想起なし：n = 17
クリスマスソング	想起あり：n = 13, 想起なし：n = 17
高嶺の花子さん	想起あり：n = 12, 想起なし：n = 18

表5 3分時点での発話と想起評定との相関

	小学生	中・高生	大学生
キセキ	.052	-.253	-.125
ドレミの歌	.394 *	.518 **	.084
クリスマスソング	.195	.048	.280
高嶺の花子さん	.251	.370 *	.117

*p < .05 **p < .01

した」の3項目の評定との相関を検討する。結果を表7に示す。小学生頃に聞いていた2曲については、「小学生の頃のことを思い出した」等の評定との間に、有意な相関は見られなかった。しかし中・高生の頃に聞いていた2曲については、中・高生あるいは大学生になってからのことを思い出したという評定と「懐かしい」の評定との間に、有意な相関が見出された。そこで「懐かしさ」の詳細を検討するため、ポジティブ感情因子等の評定についても、「小学生の頃のことを思い出した」、「中・高生の頃のことを思い出した」、「大学生になってからのことを思い出した」の3項目の評定との相関を検討した。その結果、「クリスマスソング」については、「中・高生の頃のことを思い出した」とポジティブ感情因子評定との間に $r = .550$ ($p < .01$)、「大学生になってからのことを思い出した」とポジティブ感情因子評定との間に $r = .411$ ($p < .05$)という有意な相関が見られた。「高嶺の花子さん」については、「小学生の頃のことを思い出した」とリラックス感情因子評定との間に $r = .585$ ($p < .01$)という有意な相関が見られた。ここから、比較的最近の曲を刺激に用いた場合には、15秒程度であっても関連する自伝的記憶が想起され、そのことがポジティブな気分やリラックス感を伴う懐かしさを喚起すると解釈できる。

ノスタルジア感情Ⅱの検討

3分時点で感じられた懐かしさが、川口 (2014) の「ノスタルジア感情Ⅱ」に相当するものであるか検討する。これは刺激から自伝的記憶を想起し、その後、ゆっくりと感じられるノスタルジア感情である。従って、3分時点での懐かしさと想起量との間に相関関係が見られると予測される。

ノスタルジア感情Ⅱについてもノスタルジア感情Ⅰと同じ枠組で検討する。第一に、3分間の発話に含まれる記憶の鮮明さ・詳細さを5段階で評価し、評定1・2の参加者と3~5の参加者に分け、「懐かしい」の評定に差があるか、検討する。結果を表8に示す。「ドレミの歌」のみ、発話の中に鮮明・詳細な想起が含まれていた参加者では、そうでない参加者に比べて、「懐かしい」の評定が高かった。他

表6 15秒までの発話における自伝的記憶想起の有無と「懐かしい」評定との関連

	想起	n	「懐かしい」	t(df=28)
キセキ	あり	11	6.1(1.2)	1.41
	なし	19	6.6(0.7)	
ドレミの歌	あり	13	5.9(1.7)	0.67
	なし	17	5.5(1.5)	
クリスマスソング	あり	13	5.6(1.0)	2.02
	なし	17	4.4(2.1)	
高嶺の花子さん	あり	12	5.6(2.0)	0.13
	なし	18	5.7(1.5)	

() はSD

表7 15秒時点での「懐かしい」評定と「～の頃のことを思い出した」評定との相関

	小学生	中・高生	大学生
キセキ	.250	.149	-.004
ドレミの歌	.277	.023	.172
クリスマスソング	.284	.513 **	.205
高嶺の花子さん	.153	.711 **	.453 *

* $p < .05$ ** $p < .01$

表8 3分までの発話における自伝的記憶想起の鮮明さ・詳細さと「懐かしい」評定との関連

	想起	n	「懐かしい」	t(df=28)
キセキ	あり	16	6.6(0.7)	1.37
	なし	14	6.1(0.9)	
ドレミの歌	あり	17	6.6(0.7)	2.48 *
	なし	13	5.7(1.4)	
クリスマスソング	あり	14	6.1(0.7)	1.06
	なし	16	5.5(1.9)	
高嶺の花子さん	あり	12	6.3(1.7)	1.14
	なし	18	5.6(1.6)	

() はSD * $p < .05$

表9 3分時点での「懐かしい」評定と「～の頃のことを思い出した」評定との相関

	小学生	中・高生	大学生
キセキ	.353	.056	.208
ドレミの歌	.440 *	.306	-.068
クリスマスソング	.326	-.009	.025
高嶺の花子さん	-.046	.261	-.075

* $p < .05$

の3曲では、有意な差は無かった。また「ドレミの歌」について、ポジティブ感情因子等の評定について同様の分析を行ったが、どの因子でも、鮮明・詳細な想起が含まれていた参加者とそうでない参加者で、評定に有意な差は無かった。

第二に、3分時点での「懐かしい」と、「小学生の頃のことを思い出した」、「中・高生の頃のことを思い出した」、「大学生になってからのことを思い出した」の3項目の評定との相関を検討する。結果を表9に示す。「ドレミの歌」で、「小学生の頃のことを思い出した」評定と「懐かしい」との間に有意な相関が見られ、これは発話に基づく分析結果と整合する。それ以外には、有意な相関は見られなかった。「ドレミの歌」についてポジティブ感情因子等の評定と「小学生の頃のことを思い出した」、「中・高生の頃のことを思い出した」、「大学生になってからのことを思い出した」の3項目の評定との相関を検討した。その結果、「中・高生の頃のことを思い出した」とほろ苦さ因子評定との間に $r = .434$ ($p < .05$)という有意な相関が見られた。

考 察

川口 (2014) は「ノスタルジア感情Ⅰ」と「Ⅱ」の存在を提案した。Ⅰは刺激から短時間で直接的に引き起こされる懐かしさであり、Ⅱは刺激から自伝的記憶が想起されたことを受けてゆっくりと感じられる懐かしさである。本研究は、ノスタルジア感情ⅠとⅡという異なる懐かしさの存在について、音楽を刺激として検討した。しかしその結果は、明確なものではなかった。

15秒時点における次の結果は、ノスタルジア感情Ⅰの存在を示唆する。第一に、どの曲でも、具体的な出来事を想起してもしなくても「懐かしい」の評定に差は無く、かつ7段階で6.0前後という高い評定であった。第二に、小学生頃に聞いていた2曲については、「懐かしい」と「小学生の頃のことを思い出した」等の評定との間に、有意な相関は見られず、小学生頃のことを思い出した参加者もそうでない参加者も、「懐かしい」を高く評定していた。しかし、比較的最近の曲を刺激に用いた場合には、15秒程度であっても関連する自伝的記憶が想起され、そのことがポジティブな気分やリラックス感を伴う懐かしさを喚起するという結果が得られた。これは仮説に反する結果である。あるいは最近の曲の場合、15秒より短い時間で急速にノスタルジア感情Ⅰが喚起されるのかもしれない。

3分時点では「ドレミの歌」において、発話に基づく分析でも、評定に基づく分析でも、鮮明・詳細な記憶を思い出した参加者の方が、より強く「懐かしい」と感じていた。こうした記憶を想起することが、強い懐かしさに繋がったのである。この結果はノスタルジア感情Ⅱの存在を示唆する。しかしそれ以外の曲ではこうした関連は認められなかった。

このような結果となった理由として、方法上の限界があげられる。「懐かしい」の評定は15秒時点ですでに高かった。そのため、その後の想起によって懐かしさが高まったとしても、15秒時点以上の評定をつけることができなかった。このような限界があったため、ノスタルジア感情ⅠとⅡの違いを十分に検討できなかった可能性がある。加えて質問紙法の場合、短時間で生起し変化する感情を捉えるには限界があるのかもしれない。質問紙以外の手法により、ノスタルジア感情ⅠからⅡへの変化を検討することが必要であろう。しかし一方で、2種類のノスタルジア感情を区別することには、そもそも妥当性がないのかもしれない。予備的検討で示されたとおり (表3参照)、15秒時点で感じられた懐かしさは、3分時点でも同じように感じられていたからである。

また、本研究の結果から、音楽と懐かしさに関する

る研究やその方法について、複数の知見が得られた。第一は、音楽が引き起こす懐かしさについてである。「懐かしい」1項目と懐かしさ感情に関する尺度5因子について分散分析を行った結果、ポジティブな感情がネガティブな感情よりも引き起こされやすいという傾向が見られた。音楽が引き起こす懐かしさは、光景など他の刺激によって引き起こされる懐かしさと同様、ポジティブな感情が強いということが検証された。

第二に、自伝的記憶に関する研究方法についてである。本研究では、参加者が自己評定を行った記憶想起の評定と、参加者の発話データから著者が評定を行った発話評定によって自伝的記憶を測定した。その結果、自己評定による記憶想起と発話に含まれる記憶の鮮明さ・詳細さは一貫していなかった。自伝的記憶の研究には、両者が必要だと考えられる。

第三に、使用する音楽の数についてである。本研究では、参加者が小学校3年生頃までに聴いていた懐かしい曲、中学生・高校生の時に聴いていた懐かしい曲の2種類の時期に対応する4曲の音楽を使用した。4曲を使用したことで、明るい・暗い、テンポやリズムなどの曲調といったその曲だけの影響を排除し、結果の信頼性を高めることができた。また、本研究では曲によって異なる結果も見られた。以上のことから、音楽を使用する際は、複数の曲を用いることが必要である。

引用文献

- 石井あゆ美 (2014). 音楽に対する懐かしさ感情の多面的側面がポジティブ感情喚起に及ぼす効果 生老病死の行動科学, 17-18, 15-32.
<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/36360/>
- 川口 潤 (2014). ひとはなぜなつかしさを感ずるのか楠見孝 編著 なつかしさの心理学—思い出と感情— (pp.36-38) 誠信書房

小林麻美・岩永 誠・生和秀敏 (2002). 音楽の「懐かしさ」と感情反応・自伝的記憶の想起との関連 広島大学総合科学部紀要IV理系編, 28, 21-28.

<https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00000868>

小林正法・大竹恵子 (2018). 主観的幸福感と抑うつ傾向がノスタルジア状態の喚起に与える影響—音楽によるノスタルジア感情状態喚起を用いてパーソナリティ研究, 27(2), 155-158.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/personality/27/2/27_27.2.6/_article-char/ja/

楠見 孝編著 (2014). なつかしさの心理学—思い出と感情— 誠信書房

大寺 輝・田中章浩 (2019). 聴覚刺激と嗅覚刺激が懐かしさに与える影響 日本認知心理学会第17回大会発表論文集, P2-04.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/cogpsy/2019/0/2019_83/_article-char/ja/

佐藤浩一 (2008). 自伝的記憶の構造と機能 風間書房

瀧川真也・仲 真紀子 (2014). 懐かしさ感情の構造と発達的特徴の検討 日本心理学会大会発表論文集, 78. 2AM-1-081.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/pacjpa/78/0/78_2AM-1-081/_article-char/ja/

谷口高士 (2021). 音楽と感情 中島祥好・谷口高士 編 シリーズ 心理学と仕事 19 音響・音楽心理学 (pp.121-134) 北大路書房

宇佐美桃子 (2022). 青年期女子における懐かしさ感情尺度の因子構造の検討 金城学院大学大学院人間生活学研究所論集, 22, 1-8.

<https://kinjo.repo.nii.ac.jp/records/1285>

付記

本研究は第一著者による令和5年度群馬大学共同教育学部卒業研究『音楽が喚起する懐かしさ感情の検討—2種類の懐かしさと自伝的記憶の想起量との関係—』に基づき、整理改編したものである。研究の計画にあたって、田中章浩先生（東京女子大学）、瀧川真也先生（川崎医療福祉大学）から貴重な資料をご教示いただいた。記して深く感謝する。

